私を見つめてくれますか？
私を抱きとめてくれませんか？

由梨絵／唐めは…なにももたらさない…。
生み出すのは悲しみだけ…。たったそれだけなのに…どうして？

心のどこかでは笑っていて欲しいと思ってるんだよ。
ただ…気がついていないだけで。／義之

聡／ねぇ…今は…まだだめだよ…。
篠原さんの言う通りだ…。タイミングを待とう……。ね？

前書き

貴方は、突然の暗闇に落とされたら何を感じますか？
貴方は、言葉の魔力…言霊の力を信じますか？
貴方は、触れることによって何を得ますか？
貴方は、相手を見つめることによって何を得ますか？

暗闇…それは何も見る事ができない空間。でも感じることはできるかもしれない。
言霊…古代、言葉に宿ると信じられた霊力で、発せられた言葉の内容通りの状態を実現する力があると信じられていたもの。それは…言葉に込められた想い。
触れ合う…ずっと…抱きしめあう…それだけで伝わることもある。そして…お互いを感じることが出来るからこそ、伝わる事がある。
見つめること…相手を知ること…。自分を知ること…。
……見つめることが出来ない人は…どうすればいいでしょうか？
この本を読めば少しだけわかるかもしれません。
言葉と言葉が人と人の絆と想いを紡ぐ恋愛小説、光になりたい。
物語のプロローグが今、始まります。

二〇〇三年十一月二十四日

目次

メインキャラクター紹介
サブキャラクター紹介

――― 光になりたい　本編 ―――
プロローグ
第一章
第二章
第三章
第四章

結び

河口（かわぐち） 聡（さとる） -Kawaguchi Satoru-

性別　：男
年齢　：17 才
誕生日：8 月 15 日
クラス：普通科３年 B 組
部活　：元陸上部

・思いやりのある性格で優しい。
・冷静に物事を判断し、正しい答えを導き出そうとする。それの影響か、相談相手になることが多い。
・基本的に柔軟な発想を持っている
・背は 170 と平均的
『じゃあさ、田村さんと同じ新入部員はいるの？』
『苦しみと向き合うのはずっと後でいい。今は、一歩いっぽ、田村さんが少しでも楽になることをやろう？　後ろを振り返ったり、休憩しながら、ゆっくりと前に進もう？　自分のペースで…。そして、その後で考えようよ』

田村（たむら） 由梨絵（ゆりえ） -Tamura Yurie-

性別　：女
年齢　：17 才
誕生日：7 月 1 日
クラス：普通科3 年 B 組
部活　：吹奏楽部（ソプラノフルート担当）

・主人公のクラスに転入してきた女の子
・おとなしい性格で、引っ込み思案
・全盲でパートナーである薫といつも行動を共にしている
『どうして……どうして…人間は自分たちと違う物を追い出そうとするのですか？　好奇な目で見つめるのですか？　なぜ、虐めるのですか？　なぜ…どうして……？　私にはわからない…』
『あの…決してそう言う意味で言ったのでは…』
『優しさの…裏返し…。好きと嫌いは紙一重…』

透けるような白い肌。艶やかで真っ直ぐな黒い髪は丁度腰の辺りで切られていた。比較的整った顔の作り…そしてしなやかに、かつ細く伸びた手足。美人とか可愛い…というわけではない。だが、彼女自身の存在を目に焼き付けさせるには十分だ。

腰に近づきそうな髪。顔は小さめで儚げな雰囲気を醸し出している。長い髪は先のほうでも不自然にばらつくことなく、手入れが行き届いていることを感じさせる。その細い指先は、手に持つ『天使の笛』を操り、何か幻想な魔法を作り出しているように見える。

かおる
薫　-Kaoru-

性別　：メス
年齢　：5才
誕生日：不明
クラス：普通科3年B組
部活　：無し

・田村由梨絵のパートナー
・種別は『ラブラドルレトリーバー』で、毛色はライトブラウン
・元気がよく、活発な正確だが、仕事中は完全に大人しくなる
・盲導犬としては珍しく日本語の名前がつけられている

そんなことを考えながら歩いていると、道の真中より少しよったところに、ややうすいブラウンの毛を持ち大人しそうに座っている犬を見つけた。軽くウェーブを持ち、光を放つその毛は細く繊細で、僅かな風にも動きを与えられる。クリクリとしためは遠くを見つめ、何かを待ち望んでいるようにも見える。その犬は何時も田村さんと一緒にいる盲導犬に似ている。

如月（きさらぎ） 紫穂（しほ） -Kisaragi Shiho-

性別　：女
年齢　：19 歳
誕生日：7 月 7 日
クラス：普通科 3 年 A 組
部活　：吹奏楽部（ソプラノフルート担当）
・韓国から来た少女。
・どこか悲しい目をしている。
『はい…。わかっています。私なら大丈夫』
『私も、田村さんのことが好きですから』

やや丸みをおびた顔。もともと背が低めのその子は、田村さんの隣に並ぶと一回り小さく見える。ただ、その存在感は大きく、自分がここにいると何かが示していた。それは…手に持つフルートも如月さんと重なっているからではないか。

長い髪は、田村さんよりやや短く、そして、濃いブラウンを放つ。しっかりと前を見据え、楽器を演奏するその顔は真剣その物だ。目は輝きを持ち、それでいて、優しさをも持ち合わせる。遠目にはわからないが、とても楽しそうだ。

工藤（くどう） 義之（よしゆき） -Kudo Yoshiyuki-

性別　：男
年齢　：17 才
誕生日：12 月 24 日
クラス：普通科 3 年 B 組
部活　：無所属
・河口聡の友人（悪友？）で、隣の席の人
・発想が危なく、行動が突発的
・明るい性格
・主人公とは一年生のときから同じクラスで、席順が隣のことから知り合う。
『どうした？　聡。さっさとくじ引いてしまえよ』
『しかし、男二人で弁当ってのも、なんだか味気ないよなぁ～』
『珍しいな、お前が日曜日以外に本を買いに行くなんて』

義之の横顔が夕日に照らされる。朱（あけ）に染まったその顔からは、強い信念が伺える。遠くを見据えつつ、しっかりとした目。引き締まった口もと。軽く握られている拳。その…全ての物が…義之という人物を彩る。これが……義之…か。かっこいいと思った。そして、俺は、負けたくない、そう…思った。

篠原(しのはら) 香澄(かすみ)　-Shinohara Kasumi-

性別　：女
年齢　：18才
誕生日：4月4日
クラス：普通科3年B組
部活　：ソフトテニス部
・明るく、活発な性格で、女子の中ではなかなか人気のある子
・背は低めで、童顔チックだが、性格もそうかもしれない
・ひょんな事から、主人公とよく話す間柄に…
『あんた達、なに勘違いしてるの？』
『うん。耳に聞こえるとは違う…心に響くような…音。普通、目立つ音はね、他の音に邪魔されちゃう。でも、あの二人はそんなことは無い。とても…強い…。脳に直接響くような音…。だから、心にも響く』
『おはよう、みっちゃん♪』

田村さんとは正反対のショートカット。襟足の部分を少し長くしたその髪は色素の関係で若干茶色っぽくなっている。くりくりとした眼はどことなく、小動物を思わせる。性格は明るく、女子にも男子にも結構人気のある存在だ。

田村(たむら) 由梨子(ゆりこ)　-Tamura Yuriko-

性別　：女
年齢　：不明
誕生日：不明
職業　：不明
・ヒロイン、田村由梨絵の母親
・思いやりの心が強いらしい。
『自分の思ったことを実行できることは凄いことです。誇りに思いなさい』
『由梨絵、帰ろうか』
『皆さんで支えてもらえますか？』

ふわっとしたウェーブ。栗毛色の髪。柔らかい眸。カットソーの上に軽く羽織るような形で淡紅のブラウス。アンサンブルカーディガンではないのだろうか、ロングスカートを穿いている。いかにも『大人』という雰囲気を醸し出している。上下ともしっかりと着こなすその姿は、全体的に雰囲気が田村さんに似ている。母親…だろうか。背は田村さんと同じか少し高いぐらい。じっとその目で見つめられるとなんとなく落ちつきを覚える。

相沢(あいざわ) 真美(まみ)　-Aizawa Mami-

性別　：女
年齢　：
誕生日：
クラス：普通科3年B組
部活　：
・最強の天真爛漫
・メロンパン最高主義者
『みんな早いね〜。それに、一箇所に固まって…なにやってるの？』
『やっぱり、朝はメロンパンっ♪　あっ、美味しい〜』

教室に入ってきた女の人は相沢さんだった。みっちゃんというのは、きっと、相沢真美の真美から来ているのだろうと思った。ざっくりと短く切った髪は少し癖があり、外側に跳ねている。そんな髪に細く光るヘアピンをつけ、前髪を止めていた。

新井(あらい) 美樹(みき)　-Arai Miki-

性別　：女
年齢　：17才
誕生日：10月15日
クラス：普通科3年A組
部活　：不明
・如月紫穂の隣の席の人
・明るい性格だが、どこか物腰の柔らかさを感じさせる。
『はい…しんとなった教室で、紫穂、は…すこしだけ……間を…空けて、誰、も…手を……上げな、いのを見る、と…すっと……自分から…。隣、にいた…私が…犯人だっ、て…知らないのに…』

佐々木(ささき) ひなた　-Sasaki Hinata-

性別　：女
年齢　：35才
誕生日：
クラス：保健室の先生
部活　：JRC部
・珍しい名前の持ち主で、昔は嫌いだったそうだが、今は若く見られるから、と、お気に入りらしい。
・よき、理解者で、よき人。学校のいたるところに点字を設置するように配慮したのはほかならぬこの先生
・温厚で物静か。女子から圧倒的な支持を受けている。
『目は物事をもっとも現実的に把握するもの。人間の五感の中でもっとも現実的な感覚。それを失うとどうなるか分かる？』
『すごい…。よく真面目につけてるわね』

河口（かわぐち） 総一郎（そういちろう） -Kawaguchi Soichiro-

性別　：男
年齢　：45 才
誕生日：9 月 23 日
クラス：システムエンジニア
・ぶっきらぼうと言うより放任主義。どうやら自分もそんな親を持ったらしい
・妻、香織は 3 年前に他界
・主人公、聡の父親
『可愛い子か？』
『ほぉ。今日は親子丼か。親子丼とナメコの味噌汁…なんか微妙な組み合わせだな』

いつもの、灰色地に黒い千鳥模様を配した着物を着た親父が答えた。
まだ４０半ばなのにこういうのを見るとかなり年上に見える。オヤジっぽいという意味ではない。かっこいい大人として年上に見える…。ところどころにしっかりと糊付けされ、はりを与えられたオーダーメイドの着物を着た親父の背中を見て俺は育ってきた。

佐々木（ささき） -Sasaki-

性別　：女
年齢　：
誕生日：
クラス：普通科 3 年 A 組
部活　：吹奏楽部
・田村、如月と同じ部活。
・引っ込み思案なところあり
『如月さん…本当のことなの……。ごめんなさい…本当に…ごめんなさい…。いけないって事はわかってた…。だけど…だけどっ…。ごめん…なさい……。これしか言えないから……こんな言葉しか知らないから……』

美村（みむら） -Mimura-

性別　：女
年齢　：
誕生日：
クラス：普通科 3 年 A 組
部活　：不明
・背は高めで、セミロング
・口調がややとげとげしいが、根は優しい人物
『ねぇ、私をそのフルートのライバルにしてくれない？』

佐藤（さとう）　誠治（せいじ）　-Sato Seiji

性別　：男
年齢　：17 才
誕生日：1 月 18 日
クラス：普通科 3 年 B 組
部活　：サッカー部
・河口聡の友人
・たまに、常人には理解できないことを発したりする
・黒い髪と長い髪にあこがれているらしい…。
『えぇ〜…。あの黒くて長い髪に何も引かれないのかなぁ…』
『まぁ、サッカーっていうのも悪くは無いぜ』

国府田（こうだ）　衛（まもる）　-Kouda Mamoru-

性別　：男
年齢　：32 才
誕生日：6 月 10 日
クラス：普通科 3 年 B 組、担任
部活　：サッカー部
・熱血
・不運にも３年間同じクラス、聡の担任
『以上。今日もよろしく』

～プロローグ～

ひかりの無い世界があるとしたら、それはどんな世界だろうか…。そんなことは想像したくない。でもね、世の中にはそんな世界しか見られない人がいるんだよ。

主人公のクラスに、ある人が転入してきた。その少女の名前は田村由梨絵。彼女は目が見えない。ただ、それだけ。他の人と違うことなんて、何一つ無い。

だからね、普通に生活しているんだよ。そしてね、普通に恋をするんだよ。

＊

四月七日（月曜日）　April 7 -Mon-

朝一番の太陽の光。そして、新学期が始まる今日。何もかもがいつも通りで、何もかもが新しく見える。今日から三年生になる。たったそれだけの事で、なんだか急に大人に近づいたような気がした。もちろん、やる事だって沢山ある。進路の事も含め、今年は忙しくなりそうだ…。そんなこれからの予定に頭を傾けながら、俺は朝ご飯を食べている。

「今日から新学期だな」

テーブルを挟んでの親子の会話。

「うん」

「お前も三年になるんだ、気合入れろよ」

「わかってるって。じゃ、行ってきます」

「行って来い」

いつもの父親の声に見送られ、俺は家を出た。春と言ってもまだ空気は冷たい。自転車で風を切ると体が波打った。

教室の前に立つと、俺はドアを開いた。

「ちょっと…早すぎたかな」

教室には誰もいない。

普段も早く学校には着くが、今回はその中でもトップクラスの時間帯だ。

「これじゃあ、電車で来ている人もまだいるわけないよな」

クラスも二年から三年に移動し、席は名簿順になっている。面子も変わらないのに、新任の先生のためということらしい。しかし、何となく新鮮みに欠けるこの配列。

「まぁ、いいけどな」

俺は自分の席に腰を下ろした。軽い鞄を床に置き、その中から小説を取り出した。ページを広げ、栞を取る。視線が文字の羅列を縦に追っていく。もう少しで感動的シーン――と言うところで、その作業はドアが開けられる音で中断された。俺は開かれた教室のドアを見る。

「なんだ、河口か。どうしたんだ、こんなに早く」

担任の国府田先生が立っていた。

「たまたま早く来てしまって…」

「そうか。まぁ…それじゃあ、お前には紹介しておくか。転入してくることになった田村由梨絵さんだ」

「転入ですか？」

「あぁ。田村、教室に入れ」

そう、先生が廊下に向かって言う。

「Go」

英語の発音が聞こえ、その直後一人の少女がドアの前に立つ。

「Ok」

外国圏の生徒だろうか。

だが、その考えは数瞬のうちにかき消されることになった。

「薫。Down」

彼女の右手にはドラマでしか見ない器具…というよりベルト…。ハーネスが握られている。そして、その紐の先でおとなしく床に伏せているのは…ラブラドル・レトリーバー…。
「はじめまして」
俺がそう言うと、彼女は初めてこっちを向いた。
「はじめまして…。よろしく……お願いします」
「あぁ、よろしく」
「彼女は見たとおり、目が見えなくてな。盲導犬をつれている」
盲導犬…。目が見えない人の道案内をし、歩行の安全を守るように訓練された犬の事だ。
「…盲導犬の、薫です。この子もよろしくお願いします…」
「あぁ、よろしく薫」
俺がそう言っても犬の方は殆ど見向きもしない。
「じゃあ、私と田村さんは一旦職員室に戻るから。ホームルームで紹介する予定だから、まだ誰にも言わないように」
「はい」
「失礼します」
「薫。Door」
その言葉を残し、田村さんは教室を出て行った。
目が見えない…か…。どんな世界なんだろうな…。

鐘の音と共に全員が席につく。それでも話し声がやむことはない。もちろん、俺にも例外は無い。
「よぉ、聡。元気だったか?」
「元気も何も、二週間でそんなに変わらないって」
明るい声で俺に話しかけてきたのは義之だった。
「そうか?」
俺は普通に返事をする。

「そう言うお前は、なんか変わったのか?」
「いや」
心底つまらなそうな顔をして返事をした義之は急激に顔を変え、「そう言えば、今日転校生が来るみたいだな?」と言った。
「どうして?」
いきなり話の方向を変えた義之にちょっと戸惑いつつ、相槌を打つ。俺は義之が何故そういう結論に至ったのかを聞くことにした。
「どうしてってなぁ…。クラスに机が一個増えていたらそりゃ転校生だろ?」
「まぁ確かに」
俺の机は二列目。義之の机は三列目にある。そして、四列目の一番後ろに机が一個増えていた。あそこが田村さんの席か…。そんなことを考えつつ俺は義之と話を続ける。
「女の子だったらいいな」
「やっぱり、そうなるのか」
「あぁ。当たり前だろ?」
「…そう言うものなのか? ここで男が転校してきて、男子一同ががっかりするというオチも結構あると思うけど?」
「んな、希望の無い事言うなって。夢は大きく行こうぜ!」
パシッ、と俺の背中をたたいた義之は笑顔１２０％だ。どんな小さな希望なんだろうな…。
「今日はお前らにいい話がある。特に、男どもにとってはなっ!」
国府田先生がそう言った瞬間、口笛の荒が巻き起こる。元から騒がしかったクラスは、既にお祭り状態だ。
なんなんだろうな…このクラス。まとまりが無いようでいて、こう言うときには何故かまとまりがある。去年の体育祭だって文化祭だって、直前まで内容が決まらなかったのに、突然、はりきって作業を初めて、結局展示部門で優勝してしまったし…。
「それじゃあ、紹介するぞ。転入生の田村由利恵さんだ」

朝と同じ音がして、ドアが開かれる。そして、同じ台詞。
「Go」
英語の発音が聞こえ、その直後、一人の少女がドアの前に立つ。
ドアの場所を手探りで確認すると、「薫、Ok　Go」
少女が言うと盲導犬の薫と共に入ってくる。
ちょうど真ん中あたりまで歩いた頃、彼女が「薫　Stop」と言った。
そして、俺達の方を向いて…。
「…初めまして。田村由梨絵です。よろしく…お願いします」
そこで先生が話を持ち出す。
「彼女は見て分かるように、視力が弱くて、盲導犬と行動を共にしている。私の方からお前らに注意があるからよく聞いて　おけ。まぁ一般常識のおさらいだけどな」
「まず、ハーネスには触らないこと。ハーネスを通じて盲導犬と彼女は会話をする。だから絶対ハーネスはふれてはいけない。これが一つ」
「それと、ハーネスを付けているときには盲導犬、まぁ、薫というそうだが、薫には声を掛けないでやってくれ。ハーネス　を付けているときは仕事中ということだからな」
…朝の行動を恥ずかしく思ってしまった。
「田村からは何か言うことはあるか？」
「えっと…一つだけお願いがあります」
彼女は聞こえるか聞こえないかという微妙な音量で話し始める。
「私に声を掛けて下さるときは、肩を触ったりしないで、必ず声を先に掛けて下さい。そうでないと、どこに、誰がいるか分からないので…。私は耳からの情報とハーネスから伝わってくる薫とのこの二つの情報だけで周りを把握します。ですから、それだけはお願いします」
「ということだ。まぁ、仲良くしてやってくれ。それじゃあ、田村の席は…後ろの席の中村、案内してやってくれ」
その瞬間、中村の周りにいた人たちが囃し立てる。

中村が田村さんに声を掛け、田村さんの手を握り、席まで案内した。
それを先生が見届け、そして言った。
「それじゃあ、今年一年間、よろしく！」
こうして、新学期が始まった。
同じ先生、同じクラスメイト、そして、田村さんを加えた新しいクラスで…。

～第一章～

「さて、それじゃあ今後の予定だが―――」
担任である、国府田先生が話を続ける。
まぁ、内容的には毎年変わらず、今後の予定やら進路のこと。就職希望の人は解禁まで時間がないからどうとか、進学先が決まってない人は早く決めろとか…。これから始業式があるからさっさと並べとか…。
と、いうわけで、俺達のクラスも体育館を目指すことになった。この学年になると、もう、背の順に並べとか、名簿順に…というのも無く、みんな思い思いの場所に並ぶ。当然、俺もいつものように一番後ろに並び、義之と一緒になる。
いつもは一番後ろになるのだが、今日は違った。田村さんがいたのだ。女子は女子で大抵前の方に全員で固まってしまうのがこのクラスなのだが、田村さん一人だけ後ろに並んだのである。
「田村さんは、前の方には行かないのか？」
俺は後ろを振り向きつつ、田村さんに声をかけた。
「えっと…その声は…。河口さん…でしょうか？」
「えっ…なんで俺の名前を？」
俺は自己紹介をした記憶はないのだが…。
「今日の朝、国府田先生が貴方のことをそう呼んでいたような気がしたので。でも間違いではなかったようで…。安心しました」
「それじゃあ、改めてよろしく」
「はい」
彼女は笑顔でそう言った。
「所で、さっきの質問だけど…」
「…何故、前の方に行かないか？　でしたね。私はどうしても歩くのが遅くなりがちなので、前の方に行きますと皆さんに迷惑がかかってしまうので、いつも後ろに並ぶようにしています」
「そうなのか？」
「はい。やはり、足元に注意しないといけないので…皆さんと同じ速度であることはなかなか…」
「おい、聡。列、進んだぞ」
「あっ、あぁ」
その声に俺は前を見る。俺達のクラスが体育館に入る順番が回ってきたらしい。
「じゃ、田村さん。そう言うことだから」
「はい」
俺は義之と共に体育館に入った。

少し遅れて田村さんも後ろにつく。国府田先生が全員が揃ったことを確認して全員を座らせる。
後ろから「Down」という声が聞こえた。

しかしながら、校長先生まで毎年同じことを言う。当然ながら、生徒指導部の顧問も。まぁ、一つだけ違うのは、盲導犬への配慮と注意があったこと。
それだけだった。

＊

教室に戻ると、田村さんは人気者だった。まぁ、ちょっと表現は違うかもしれないけど。田村さんの周りにはクラスの殆どの女子と、一部の男子が集まり質問攻めにしている。転校生の宿命…というものだろうか。
「聡。お前は田村さんに興味は無いのか？」
義之が話しかけてくる。

「興味って？」
開き書けていた本を度閉じて俺は義之の方を振り向く。
「いや、転校生の田村さんのことをどう思ってるんだ？　って話」
「そんな事言われてもなぁ…」
俺は田村さんの方を見た。
人の隙間から僅かながら田村さんの姿が見える。
早朝、朝、今…今まで何度か田村さんを見てきが、控えめな印象がある田村さんはその性格も全体に表れているようだ。透けるような白い肌。艶やかで真っ直ぐな黒い髪は丁度腰の辺りで切られていた。比較的整った顔の作り…そしてしなやかに、かつ細く伸びた手足。美人とか可愛い…というわけではない。だが、彼女自身の存在を目に焼き付けさせるには十分だ。
「ほら、見とれてるんじゃねぇよ」
「見とれてなんか…」
「じゃ、なんで熱い眼差しで田村さんを見つめてたんだ？」
「いや、それは…」
「なんだか、面白そうな話をしてるねぇ」
「よっ、誠治」
「おはよう」
俺達の会話に割りこんできた誠治はさっそく話を変な方向へ捻じ曲げる。
「田村さん、どう思う？」
「誠治もその話か？　まっ、俺的には微妙なラインだな。悪くは無いが…」
「えぇ～…。あの黒くて長い髪に何も引かれないのかなぁ…」
「すまんが、俺には黒髪ロングの属性は無いから」
…二人とも変な方向性で話を展開し始めた。俺はそんな二人を無視して、朝読み損ねた本を開く。
再び時が止まった。
今度はなんの音も聞こえない。
水を打ったような静けさ…。

優は彼女の眸を見つめた。
その眸はかすかに青みがかっている。
…。
綺麗だ…優は純粋に――――
「「お前はどうなんだよ、聡」」
突然二人同時に声を掛けられる。
「しかも、気がつかない間に本読んでやがる…」
「それで、聡は田村さんのこと、どう思う？」
「えっ…俺…？」
「「そう」」
「そんなこと急に言われても…」
『普通科二年Ｂ組、河口聡。今すぐ職員室、村上のところまで。繰り返す…』
「というわけだ、じゃあな」
「逃げられた…」
俺はドアを開け、教室を後にする。
しかし…今になって何で陸上部の顧問に呼び出されるんだ？　もう俺は止めたんだけど…。そんなことを考えながら、階段を降りているときだった。手に違和感を覚え、俺は立ち止まる。
「ん？」
さっきまで触っていた手すりに、何か素材の違い…というより、突起があたった気がしたのだ。手すりをよく確認すると、点が寄り集まっていて、なにかの記号を意味しているような記号らしきものがあった。透明なシールの上に突起状に加工されたそれは、『点字』だった。
…二年の終わりにはこんなのは無かったけど…。
きっと田村さんが転校してくるから、学校側で対応をしたという事だろう。
俺はそこまで考えると、再び職員室を目指した。

＊

「結局、なんだったんだ?」
教室に戻って席につくなり義之が聞いてきた。
「あぁ。陸上部に復帰しないか?　って」
「まぁな。お前、パッとしない顔してても、陸上はそこそこ成績よかったし」
「短距離だけな。しかも、本当にそこそこの成績だったからね。どうせ、人数あわせのために戻そうとしているんだと思うよ」
どっちにしても、俺がやめた理由なんで、なんとなく…だからなぁ…。いまさら戻りたくないというのが真相だったりする。
「そう言うもんか?　だって、陸上に団体なんて種目、リレー以外に無いだろ?」
「まっ、どっちにしてももうやめたんだし」
「聡はどちらかというと文系の人間だからな、運動は似合わないぜ」
ちょっとだけ、カチンと来た。
「おいおい、どう言う意味だよ?」
「気にすんなって。ほら、一時間目の授業、始まってまうぞ」
「そうだな」
その言葉に俺は鞄から道具を取り出し、机の中に入れた。
「起立っ!」
号令の挨拶と共に、新学期、一度目の授業が始まる。ロングホームルームという授業が…。

＊

四時間目の授業が終わり、午前授業である今日はもう帰ることができる。
「聡、一緒に帰ろうぜ」
「あぁ」
義之に声を掛けられた俺は、一緒に帰ることにした。

「義之、商店街、よっていい?」
「あぁ、俺はかまわないぜ」
この商店街は学校から俺の家のちょうど間にある商店街。柔らかいオレンジ色のブロックの上に、サンディーブラウン色のブロックがまばらに置かれた、全体的に暖かみのある色合いを持っている。ショッピングモール式になっていて、アーケードが設置されているここは、歩行者天国の影響もあり、日夜かまわず人がいる。駅前の通りから直接来る事も出来るし、色々な店があるからだろうか。
そんな沢山の店の中から、俺はいつもの本屋に義之と共に向かった。
「しかし、また本屋か?」
「いいでしょ。読みたいんだし」
「お前、本屋に行くのはたいてい日曜日じゃないか。どうしたんだ月曜日なんて」
そう。俺は一週間の内にだいたい二、三冊の本を読むわけだが、その殆どが注文した本になる。一週間分の本をまとめて日曜日に取りに来るようにしているから、日曜日はほぼ毎週この本屋に来る。
『Book House　河上市中央商店街店』とプリントされだ自動ドアをくぐると、本屋独特のにおいが漂って来た。
この本屋は週刊誌といった本はあまり取り扱っていないが、文学作品や医学書…つまりは週刊誌などをのぞいた本がそろっている。店長さんがなかなか物知りな人で俺は結構好きだ。それに、店の面積も広くなかなか使える本屋だ。
入り口を入り、フロア中央にあるレジに俺達は向かう。
「すみません。頼んでいた本が届いたという連絡があったのですが…」
「お客様のお名前をお願いします」
若い女性の店員が俺に聞いてきた。
「河口聡です」

「少々お待ち下さい」
そう言いながらレジの奥にある注文書籍の欄を探していく店員。店長さんは今日はいないようだ。いつもならどこからともなく顔を出すのだが…。
「んで、今回は何の本を頼んだわけ？」
隣でその様子を見ていた義之が俺の顔をのぞき込みながら聞く。
「お前が日曜日じゃなくて、届いたその日に取りに来るほんの中身は…」
なかなか鋭いな…。
「でも、今回は専門書だからおもしろい…というより、興味がある…の方だし…」
「そうか…」
店員から本を受け取ると、俺は義之と共に本屋を後にした。

＊

「ただいま」
「お帰り」
誰もいないと思っていた家に今日は親父が先に帰っていた。
「早いね」
靴を脱ぎながら、そんなことを言う。
「当たり前だ。今日は四月七日だからな」
四月七日…何かあったっけ？　お母さんの命日でもないし…。
「なんかあったっけ？」
「いや、何もない」
なんだよ…そりゃ…。
「とにかく、今日の晩飯は聡の当番だからな」
「わかってるって」

俺は制服のままエプロンを付け、台所に立つ。
エプロンは前に掛けるタイプじゃなく、袖がついている油料理にも使えるエプロンだ。…色がピンクなのだけをのぞけば、なかなか便利なものである。
「あれ？　三つ葉は？」
冷蔵庫の野菜庫をあけながら俺は親父に聞いた。
「あぁ、三つ葉は今日の弁当に使ってしまったなぁ」
「そう。ならいいや」
親子丼の付け合わせの澄まし汁にしようと思ったけどないなら仕方がない。
俺は鶏肉をパックから開封すると同時に醤油と酒で作ったタレに入れた。その間にナメコを準備し、ネギを刻む。煮干しでだしを取って、鍋にナメコとネギを入れ、煮立てる。フライパンに水、醤油、酒、砂糖、みりんを入れ、こちらも煮立てる。
タマネギを切り、みそを準備する。途中、ホンダシを加え、沸騰する直前まで加熱する。フライパンに切ったタマネギを入れ、タレに付けた鶏肉を入れ、強火で加熱していく。鍋にみそを入れ、沸騰させない程度の温度で温める。お椀を調理台にのせ、左手に卵を持ちつつ、右手に一個ずつ移しながら片手で割って準備したお椀に入れ、かき混ぜる。味噌汁の方は火が粗方通ったようだ…俺は火を止める。
フライパンの上のタマネギが音を立てながら踊り、次第にその色を透明に変化させ、タレを吸収し、今度はだんだんときつね色になっていく。鶏肉はピンクを失い、火が通った合図となる。俺は溶いた卵をフライパンに流し込み、半熟になるまで加熱し、火を止めた。

「はい」
「ほぉ。今日は親子丼か。親子丼とナメコの味噌汁…なんか微妙な組み合わせだな」
「誰だよ、三つ葉を使ったのは」
「しょうがないじゃないか…」

「まぁいいけどね。それじゃあ頂ます」
「頂きます」

「聡、なんかおもしろいことあったか？」
高校生になるとあまり親と話さなくなる人が増えると言うが、我が家は例外だった。お母さんが死んでから、俺達は二人でこの家で過ごしてきた。それがお互いを認めることになり、お互いを尊重しあうという事につながった。お母さんも、今頃上の世界でほほえましく見守っていることだろう。
「う～ん、転校…いや、転入生がうちのクラスにきた」
「へぇ～珍しいな、高校で転入なんて」
「うん…。目が見えない子なんだけどね。盲導犬と一緒に入学したよ」
「盲目か…。女の子か？」
どうして俺の周りにはこういう人が多いのだろうか。
「女の子だよ」
「可愛いか？」
そして、話は結局こうなるわけだ。
「まぁ、そこそこ…かな」
「…ものにしろよ」
「どうして、そうなる」
「いや、だってお前、最後に彼女できたのいつだ？」
「それは聞かないでくれ」
…小学校…6年生だったかな？　思い出したくもない彼女いない歴を思い出させ、俺は少し憂鬱になった。
「まぁ、せいぜいがんばりな。私の目が黒いうちにつれてこないと、親子心中するからな」
「いつ死ぬんだか…」
「おいっ！」
笑いながらも鉄の制裁が下された。

四月八日（火曜日）　*April 8 -Tue.-*

「じゃ、行ってきます」
「あぁ、行ってらっしゃい」
朝の挨拶もそこそこに俺は家を出た。自転車もいつもより音が軽い。いつもより少しだけ家を早くでた俺は学校に向かった。
そう…誰もいない静かな教室で本を読むため。家で読んでもいいのだが、学校というあの環境がなぜか俺にはちょうどよかった。朝の静けさから授業の始まる喧噪を次第に迎え入れつつ、読書という時間に浸る…。これが俺の今の楽しみだった。そう…誰もいない教室で…。

＊

いつものように前のドアから入る。
春の日差しに温められた空気が俺を包み込む。暑すぎず、寒すぎず…どことなく心地いい空気。そして、心地いい空間がある。そんな空間。このクラスのメンバーでは俺しか味わっていないはずの空間に今日は先客がいた。
長い髪。ほっそりとした体。雪を欺くような白さの肌をもったその少女は音に反応して俺のほうを向いた。
彼女は目を閉じている…。だけど…なんとなく目が合ったような感覚を覚えた。
「おはよう。田村さん」
「おはようございます。河口さん」
彼女は殆ど浮揚の無い声で言った。そう…彼女の雰囲気はそんな感じだった。どことなく、おしとやか…というよりも、物静かな雰囲気。彼女自身か

ら発せられる空気。
「早いんだね」
空間に音が無くなるのを懸念した俺は、田村さんに質問をした。
「そうですね…。これ以上遅く来てしまうと、廊下に人が増えてきて私が歩くと邪魔になってしまいますので…」
そこまで彼女は気を使っていたのだろうか。
「そんなこと気にしなければいいのに」
「それに、薫のこともありますから」
「そうか…」
いくらなれているといっても、朝の廊下ほど人が多い時間は無い。そこを避けて通るのは田村さんなりの気使いだったのだ。
「ところで、河口さんはどうしてこんなにも早く来られたのですか？」
「俺か？　本が読みたかったからね」
「本が…読みたいから…？」
「うん。この学校のこの教室…朝の日差しが差し込む教室の雰囲気が好きだからね」
東から、一日の始まりである朝陽が差し込む教室。その光を、音の無いこの広い空間で、自分一人で独り占めに出来る事が好きな人は、きっと俺以外にもいるだろう。
「本を読むのが…好きなのですね」
「あぁ。田村さんは好きなことってあるでしょ？　何が好きなの？　趣味とか…」
知らない間に会話が弾んでいく。これが朝のこの教室の魔力だろうか。独特の雰囲気を持っている教室は魔法使いだ。
「そうですね…。音がないという空間はあまり好きではないので、よく音楽は聴いたりします。それに読書も比較的好きですよ」
「本…という事は、点字本になるの？」
「はい…そうですね。それに、点字本だけではなく、テープに録音してもらったものを聞く事もあります」
「なるほど…」
「すべての本は無料で点字にすることができるので」
「無料で？」
「はい。ボランティアの方もいますし、書籍を点字にしたり、ＣＤやカセットに録音してくれる機関もありますから」
「へぇ～」
「河口さんはどのような本を読むのですか？」
「俺か？　色んなのを読むけど…ファンタジーとかが多いかな。でも、本当に色々な本を読んでるから…」
「そうですか。色々な世界に興味があるという事はいいことですよ」
「そう言ってもらえると嬉しいよ」
田村さんは本の事を『世界』と言った。俺と同じ考え方を持っているのだろうか…。そう…本は一つの世界…。そこにある記されている事は別の世界で起きた出来事を記したものだから…フィクションでもノンフィクションでもそれは変わりない。少なくとも、俺達が本を読んでいるとき、俺達の心は別の世界にあるから…。
「おはよう」
クラスメートの篠原さんが入ってきた。田村さんとは正反対のショートカット。襟足の部分を少し長くしたその髪は色素の関係で若干茶色っぽくなっている。くりくりとした眼はどことなく、小動物を思わせる。性格は明るく、女子にも男子にも結構人気のある存在だ。
「おはよう、田村さん」
「おはようございます。篠原さん」
「いやぁだ～『さん』付けで呼ばないでよ♪　私のことは『しの～』でいいから」
篠原さんの登場によって、一ページも進むことなく、俺の時間は終わってしまった…。なぜなら…会話に巻き込まれたから…。

朝の教室でのやり取りは続く。
「それにしても、大人しいよね。この犬」
篠原さんがそんなことを聞く。…そう言われてみればそうだな…。教室に入ってからはずっと床に伏せている…。眠っているかのような姿勢だ。
「本当は薫が元気がいい犬ですけど、ハーネスをつけているときはまったくその気が無くなってしまいます」
「へぇ～。ねぇ田村さん……って由梨絵って呼んでいい？」
「はい。構いませんよ」
「由梨絵、ハーネス外してみてもいいかな？」
中々大胆なことを言う。
「…私も外してあげたいのですけど…リズムが出来あがってしまって…」
「そっか……残念」
手のひらを上に向け、そのまま空気を持ち上げた。心底残念そうな仕草を見せる。
「はい…」
同時に田村さんは俯いてしまった。
「ちょ、そこまで気にしなくていいって。機会はあるんだし。今度でいいよ♪」
ぱっ、と、笑いながら篠原さんは言った。
「はい」
その顔を見て…いや、その言葉を聞いて田村さんも安心したのか、はじめて笑った。

＊

一時間目の担当の先生が入ってくると共に、教室にいる生徒は立ちあがった。全員が立ちあがったのを確認した号令が、「おねがいします」と、礼をかける。そして、礼をしたみんなは思い思いに席に着いた。

「しかし、この授業ほど楽しい授業はないと思うぞ」
「うん。新学期早々、この授業ならなんとなく気分がいいね」
火曜日一時間目の授業は国語。
担当の先生は初老の男の人で、背は低め。いつも黒いスーツでビシッと、きめている。その先生がチョークを取って黒板に向かった。しかし、黒板には朝の連絡事項が書かれている。日直が消し忘れたのだ。俺が日直の方を向くと、日直は口をあけてしまっている。己のあやまちに気がついたのだ。
その先生———芳賀先生は何事も無かったかのようにその連絡事項の上に何も無いように流暢な文字で、“『**0歳時がことばを獲得するとき**』**作、正高信男**”と書いた。
しかし、その一部は文字が重なっていて読むことが出来ない。俺達の方に振りかえった先生は心底楽しそうだ。
「それじゃ、一時間目だけど、普通に授業はじめるからな。田村さん、今年一年よろしく」
一人だけ自己紹介をしてさっさと授業をはじめてしまった。
まぁ、芳賀先生はいつもこんなスタイルだ。所々ひねくれているが、そこが楽しくてしょうがない。中には嫌いな人もいるらしいが、俺はこの先生が好きだ。色々と面白いことを、授業で（脱線したときに）教えてくれる。
「ということは、子供が発生する言葉は、ニュアンスの相違により、それが自分に関われば情動的、第三者に関われば叙述機能を果たし———」
子供が発生する言葉には同じ言葉でも色々なニュアンスがあるらしい。たとえば、『トートー』という言葉。
これは、母親に対すれば、お父さんが帰ってきたということ、自分に対していった場合はお父さんを呼ぶこと…などの例である。語彙能力の発達した俺達にはもうわからないかもしれないが、子供は子供なりにコミュニケーションをとっているということだ。
…言葉…か。

ふと、田村さんの事がよぎった。
彼女にとってのコミュニケーションの手段は言葉がメインだろう。俺達はスキンシップといいながら、よく手を叩き合ったりする。でも、『身振り』というコミュニケーションを彼女は理解することが出来ないのだ。
今日の朝もそうだ。篠原さんがやった残念という仕草。俺にはわかるが、田村さんには見ることが出来ない…。彼女は一つのコミュニケーションの手段を失っているんだ…。
…それ以前に、どうやって授業を受けているんだろうか…。
後ろを振り返る。
一時間目なのに、半分の生徒が宇宙遊泳をしている。この先生、何も言わないけど、点数はしっかり引いているんだよな。
…田村さんは点字化された教科書を指でなぞりながら、先生の話を聞いている。
ん？
机の端に銀色の光る四角い箱のような物が見えた。光が反射してあまりよく見えないが、それは、通販でも売っているボイスレコーダーに見える。
なるほど…。
一つ謎が解けたことに満足し、俺は前に向き直った。